陳述書

村松　恭子こと 勝田　恭子

目　次

第１　略歴
第２　「人魚伝説」「それからの夏」創作のプロセス
第３、鄭義信氏の退団時のやり取り
第４、鄭氏の退団後の上演について
第５、最後に

第１　略歴

私は、１９６２年、長野県に生まれ、劇団「第三エロチカ」を経て、１９８８年に設立２年目の劇団「新宿梁山泊」に入団。当初より俳優、小道具係り（１９８９年からは小道具チーフ）を兼任。テントの設営、制作、衣装の手伝い他雑用も常に引き受ける。
１９９９年に劇団「木山事務所」公演「三人姉妹」主演。
同年９月、新宿梁山泊を退団。
　　１１月、劇団「スペースＵ」公演「切断源氏」出演。
２０００年の「マリリンとアインシュタイン」以降、劇団「勝田演劇事務所」で多くの作品に主演。
２００６年、劇団「木山事務所」公演「ハリウッド物語」、高原秀和演出「Love Punk」、望月六郎演出「贋作・人形の家」出演。
２００７年「贋作・春琴抄」その他、映画、テレビドラマ等出演し、現在に至っています。

２００６年より有限会社ワンダープロダクションに俳優として所属しています。
１９９９年に結婚し、勝田恭子になりましたが、芝居などでは旧姓村松恭子の名で出演しています。

新宿梁山泊在団時代には、「人魚伝説」「十六夜の月～梁山泊版四谷怪談～」「楽屋」の主演を、「千年の孤独」「映像都市（チネチッタ）」「愛しのメディア」「それからの愛しのメディア」「夜の一族」の準主演を演じました。

私は、新宿梁山泊に、旗揚げに参加した鄭義信氏より 1 年遅く入団し、鄭氏が退団した１９９５年より４年あとまで在籍しました。

なお、新宿梁山泊の事務所が「杉並区高円寺南５－４４－１」から今の中野のゴールデンマンションに移ったのは、９９年７月の「千年の孤独」紀伊国屋公演後の夏のことです（私も引越を手伝いました）。

これから、私が新宿梁山泊在団時代に経験した事実を項目別に述べたいと思います。

第２　「人魚伝説」「それからの夏」創作のプロセス

まず、鄭義信氏の戯曲「人魚伝説」「それからの夏」はどのようにして作られたかということですが、この２作品に限らず、鄭氏の「新宿梁山泊」在団時代に書き上げられ、彼の名前で発表された作品の全てに演出家や俳優は全く関与していません。私が在団中（１９８８～１９９９年）、鄭氏の作品について演出家や俳優によるワークショップで作り上げるなどの作業は一度もしていないからです。もちろん演出家や俳優が書かれた作品について鄭氏に意見やアイディアを述べることはありましたが、それは世界中どこの作劇現場でも行われている作業であり、それをもって劇団員の共同作業で書き上げたとは言いません。劇団員から出された意見を作品に反映させたり、彼なりの解釈に基づいて書き直していたのはあくまでも鄭氏一人であり、彼は稽古場や旅公演先の宿舎でも一人で、その書き直しを度々行っていました。勿論、家に帰った後の鄭氏が一人で書いていたかどうかまでは証言できません。しかし、稽古場や旅公演の宿舎で、ほとんど徹夜で台本を書き上げる鄭氏の姿をいつも見ていました。他の人物が代わりに書いている姿を見たこともなければ、聞いたこともありません。

当時、鄭氏は作家の他に俳優、照明、小道具、運搬用軽トラックの運転手その他設営の為の雑用も兼任しており、執筆は主に全ての作業を終えた深夜に及びました。しかし、他の作業と違って執筆は彼にしか出来ないものであったので、我々劇団員が代わってやることは不可能だったのです(注)。

（注）確かに、新宿梁山泊にはコビヤマ洋一氏というもう一人の劇作家（兼俳優）もいます。また、元新宿梁山泊の東憲司氏は、在団中は一本も自作の戯曲を発表することはありませんでしたが、退団後、「桟敷童子」という劇団を旗揚げして以来、今日まで自作戯曲を何作も上演しています。しかし、鄭氏の在団当時は代表的座付き作家は鄭氏一人であり、

鄭氏の作品世界によって新宿梁山泊の芝居の特色が作られていたと言っても過言ではありません。そのことは、新宿梁山泊のホームページの「新宿梁山泊の軌跡」をご覧になれば一目瞭然です（乙４。http://www5a.biglobe.ne.jp/~s-ryo/past/kiseki.html）。

第３、鄭義信氏の退団時のやり取り

１、退団の理由について

これについて、鄭義信氏は《最大の原因は、金守珍氏の人間性に対する不信感から（退団するまでの約９年間、常に、代表である金守珍氏の罵詈雑言に耐える日々だった）。》と言い、新宿梁山泊は《94 年 12 月、金守珍と被告で話し合った結果、被告が退団することになった。》と言っているそうですが、私は、鄭氏の言い分を信じます。というのは、鄭氏が金守珍氏から日常的に怒鳴られたり人格を否定するようなことを言われるのを入団以来ずっと目撃して来たからです（もっとも、私を含めてほとんどの劇団員も鄭氏が置かれた状況と同じだったので、この状況に麻痺していたかもしれません）。

私の記憶では、鄭義信氏が映画「月はどっちに出ている」で賞を取った後、外部からのオファーが増えて映画の仕事を頻繁にするようになった９４年頃から、金守珍氏の風当たりが特に強くなったように思われます。９４年の春、鄭氏が書いてきたものが金氏の気に入らないので使用しなかったことがあり、その時金氏は「稽古が延期になったのは鄭氏のせいなので、無駄になった稽古場の使用料（劇団事務所、倉庫、稽古場を兼ねていたため、毎月劇団員から聴衆した団費によって支払われていた）を鄭氏のポケットマネーで支払うこと」と求めていたのを目撃しています。そのとき、作品を書くのは大変なことで、しかも作家である鄭氏ひとりにまかせきりなのに、ペナルティまで課すのは気の毒だと思った記憶があります。その上、当時、劇団員は一年中拘束されていたため常に金銭に困っており、稽古場賃貸料は数十万円単位だったので、当時としてはきつい罰だったのです。私も９５年の「人魚伝説」公演で、金氏から「主役なのに撤収作業に２０分遅刻した」かどで全員分の昼食代金を要求されたことがありましたので、金氏に「いい気になっている」と思われた人間に科するいかにも金守珍氏らしい罰かもしれません。このとき没になった鄭氏の作品はその後他で上演しているのを見ましたが、なかなかいい話だと思いました。

私も退団後、様々な劇団の現場を経験してみて、作家はどこでも尊敬され大事にされるのを知り、そこで初めて、鄭氏のおかれていた状況は実に特殊だったということを知りました。

２、９５年１月の劇団員の前で金守珍氏と鄭義信氏のやり取り

このとき、金守珍氏が主な劇団員を集めて、鄭氏を囲み、皆に慰留するよう要請しました。もちろん金氏本人も慰留していました。

どうしても辞めたいという鄭氏に対して、全員に引き止めの言葉を言わせようとしていたのです。皆、順番に金氏の意を汲んで慰留の言葉を言いましたが、私の番が来たとき「義信さんの人生だと思うから好きにして下さい」と言いました。そのとき今までのことを思い出して泣いてしまったら、金氏は鄭氏に向って「こんなに村松が泣いているのに、平気なのか」「裏切りだ」「金に目がくらんだんだ」「じゃあ、なんで今まで辞めなかったんだ」等言って責めていました。すると鄭氏が「それはみんなを愛していたからです」と言いました。その後も金氏はさんざん責めた挙句、最後に鄭氏の作品の上演の話になり、金氏が鄭氏に「人魚とチネチッタ(注)はどうするんだ。やらせない気か。」と聞くと、鄭氏は「ひと言断ってくれれば上演してもいいです」と答えました。

このとき、劇団に上演権を譲ったといった話を聞いた記憶はありません。作品は作家のものだと思いますから、そのような話がなかったのは当然だと思います。

（注）人魚は「人魚伝説」、チネチッタは「映像都市」のこと。この２作品は特に評判がよく、何度も再演しました。

第４、鄭氏の退団後の上演について

１、1995 年４月「人魚伝説」

このとき、金守珍氏の提案で、ラストシーンを、故江戸川はせを氏が演じたスカ爺の台詞を誰も何も言わず、出演者が「彼がいたはずの空間」を見つめてうなずくというふうに変更しました。しかし、この数分間のシーンは、事情を知らない観客には何のことだか分からないだろうなと思いました。

２、1996 年「愛しのメディア」韓国公演

(1)、この韓国公演で上演した芝居は次の通りです。９２年から上演していた「愛しのメディア」の台本全篇に、「千年の孤独」の『あげは達の台詞』『ヒカルの台詞』と『男と女の台詞』と『火ねずみの台詞』、「それからの愛しのメディア」（改題して「それからの夏」）の『傷痍軍人達の台詞』、さらに柳美里氏の「向日葵の柩」の『女達の台詞』を挿入したもので、本来の「愛しのメディア」よりもずっと長いものでした。挿入したものは「愛しのメディア」の上演台本（乙

２）の中に一緒に入っています（但し、『男と女の台詞』は散逸したか最初から配布されなかったかのいずれです）。

その上、この公演では、「千年の孤独」に登場する「男」と「女」の役を別の登場人物「火ねずみ」とその「女房」にやらせて、「火ねずみ」とその「女房」に『男と女の台詞』を喋らせています。

なお、以上のように３作品を「愛しのメディア」に挿入したことは、この公演に出演した私自身の記憶と、この上演台本（乙２）に書き込んだ私のメモ（例えば、台本の裏表紙に作品ごとの配役を記してあります）から間違いありません。

(2)、したがって、この公演は「歌と踊りだけであり、芝居にしていない」ものではなく、芝居にしています。実際、私は以下のもろもろのことを鮮明に覚えています。

このとき私は、『西』役で出演しました（９２年の初演以来、数回を除いてずっとこの役を演じてきたので、間違える筈がありません）が、最初の『あげは達の台詞』に使った番傘を口にくわえ、着物のまま野外劇場に使用していた城門の上までイントレ（工事現場でよく使用する足場の事）を大急ぎで登ったのを覚えています。なぜなら、すぐさま「愛しのメディア」の人物達の衣装に着替えて、芝居の小道具全てが入ったトランクを抱えて舞台に降りてくるまでの時間は、草太とロクの短い台詞の間だけだったからです。駆け下りながら台詞を言ったので息が切れました。

また、芝居の小道具が入った４人お揃いの４つのトランクを間違えるとその後の芝居の小道具が混乱するのでそれぞれのトランクにカラーテープで目印をつけた記憶があります。さらに、キャバレーのシーンでは客いじり（劇中人物のキャラクターのままで、台詞及び予め稽古で決めたアドリブ等を観客にかけ、観客と直接やりとりしながら芝居をすること）をし、韓国語の台詞で笑いをとりました。舞台が野外なのでテント（新宿梁山泊は、しばしば巨大な仮設テントを建て、その中に舞台、客席及び照明や音響のオペレーター席をしつらえ、芝居を上演しました）のときよりさらに台詞が聞こえにくく、そのためワイヤレスマイクを仕込んでいました。そのため、冒頭のあげは達からメディア達に、また最後はあげは達にと、衣装を変えるたびにマイクのバッテリーが邪魔だったので、衣装係にバッテリーを入れる袋を作って貰いました。また土手の上で言うあげは達のシーンで、川原洋子氏がマイクをつけ忘れたので金守珍氏に怒られていた記憶があります。あげは達の一人でも台詞が聞こえないと、あげは達同士の掛け合いが滅茶苦茶になってしまうからです。私は小道具部のチーフ

でもあったので、ほとんど全ての小道具（これは芝居に不可欠なものです）が当時の台本に記されています。また、観に来てくれた劇団「木花」や「ゴリペ」の俳優達と終演後話しましたが、「木花」の呉先生が金守珍氏の演出を誉めていました、「この城門の空間全てを使いきったいい芝居だ」と。照明は元黒テントの松本直み氏がフィリピンから来てやってくれましたが、稽古場に通し稽古を観に来てくれた松本氏は、「この芝居、久しぶりに見たけれど、やっぱり義信（鄭氏）の書く本はいいね。」と言って、涙ぐんでいたのを覚えています。
(3)、また、この芝居でベースになった作品は「愛しのメディア」です。「愛しのメディアーそれからの愛しのメディア」ではありません。それは私が持っているこのときの上演台本（乙２）を見てもらえばすぐ分かります。

もともと後者は「愛しのメディア」をベースにした作品ですが、登場人物、設定等が全く違います。

これは「愛しのメディア」の上演に参加しなかった黒沼弘己氏と朱源実氏のために鄭氏が、続編（「それからの愛しのメディア」）を書くと金守珍氏から聞きました。黒沼弘己氏と朱源実氏が、自分達の年齢や体型から「(「愛しのメディア」の登場人物の）マラソンランナーは出来ないが、その後引退して中年になったデブな親父ならやれる‥‥」と雑談していた内容で本当に書くと聞いたので驚いた記憶があります。
(4)、「愛しのメディア」は鄭氏の黒テント時代の作品だと聞いており、故江戸川はせをさんこと畠山繁氏が「この作品を黒テントが上演した時、義信（鄭氏）を発見したんだ。岸田戯曲賞をとらせようと思ったが駄目だった。」と述懐していたのを覚えています（畠山氏は以前、「新劇」という雑誌の編集長を務めていました)。この時、そんな以前から鄭氏のことを評価していたのだと思いました。
(5)、この上演は「愛しのメディア」全篇にいくつものの芝居の台詞を挿入したもので、とうてい４５分では終わらず、２時間は確実に越えていたと思います。

３、1999 年「千年の孤独」新宿紀伊国屋ホール公演

「千年の孤独」はそれまで何度も再演して来た芝居ですが、台本上、女性役の万歳婆を男性役の爺にしたのはこの公演が初めてでした。初め稽古場では三浦伸子氏か梶村ともみ氏が万歳婆役をやるということで稽古していました。主な出演者は皆忙しいということでずっと自主稽古だったので、三浦氏、梶村氏らは稽古に参加しないまま、ある日「彼らは出演しない。原昇を万歳婆にする」と金氏から告げられました。しかし、最初、原昇氏を万歳婆にすると決めても

私はなんら不思議に思いませんでした。金守珍氏も「人魚伝説」などで婆役を度々演じてきたからです（ただし、それはあくまで女性の役としてです）。しかし、今回は、女性の役を男優が演じるのではなく、万歳婆を万歳爺に変えるのだと知って驚きました。女性の役を男優が演じるのと、女性の役を男性の役に変更するのは、全く次元の違う話だからです。

それだけではなく、この万歳婆は作品の本質上からしても、男性の役に変更することは許されないものです。なぜなら、「千年の孤独」の主人公を取り巻く女性達は、皆「あげは」という象徴的な女性像の分身であり、当然万歳婆もその一人であることは、この作品に関わった俳優、スタッフ、まして演出家は周知の事だからです。

しかも、金守珍氏自身も「万歳爺は万歳事件の関係者と言う事にしよう」と言っていました。後日調べるまで私はその事件（万歳事件または三・一独立運動とも呼ぶ。日本軍統治下の朝鮮での独立運動。１９１９年３月１日に、京城のパゴダ公園で独立宣言が発表され、『万歳（マンセー）』と叫ぶ１０万人の市民デモが起こった）のことを知りませんでしたが、「万歳」というのは在日韓国、朝鮮人にとっては重大なキーワードだと分かり、万歳婆が「目立たない」どうでもよい存在などでは決してないことも明らかです。その意味でも、万歳婆をめぐる変更は重大なことだと思います。

第５、最後に

私が在籍していた当時、芝居を上演する為に日々苦労を共にした新宿梁山泊のかつての仲間と、よい作品を生み出そうと懸命に執筆していた鄭義信氏がこのような形で争うのは、とても胸が痛むことです。

新宿梁山泊の方々は、過去の作品に捉われずに、未来のみを見つめて、また新たな作品作りに取り組んでいって頂きたいと心より願っています。

以上、陳述いたします。

2007年12月4日

村松恭子こと

勝田恭子

東京地方裁判所民事第４０部　　殿